＜特別活動＞

特別活動における主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

～検証改善サイクルを機能させ、よりよい人間関係を育む～

大垣市立興文中学校　教諭　三輪　大輔

概要

本実践は新学習指導要領の全面実施に伴い、係や委員会活動の改善、日常生活や体育大会といった集団活動の中で PDCA サイクルを機能させ、生徒が検証改善する中で、主体的・対話的で深い学びの実現を目指したものである。生徒達の「よりよい人間関係」を育むために、本実践では「生徒自ら学級の実態を捉え、課題を見出し、解決方法までを考え、合意形成を図る指導方法の工夫」「学級の諸課題に多面的・多角的に解決策を見出そうとするリーダー指導」「学級課題の設定から振り返りまでを再構築し続け、日常生活を通してよりよい人間関係を形成し続けようとする生徒の育成」の３つを研究内容とした。結果として、年間を通して生徒自身が検証改善サイクルで学級をよりよくし続けようと努力した。また、様々な視点や立場から課題を投げかけられるリーダーの成長が見られた。また、学校評価アンケートからも「仲間と何かをやり遂げてうれしい」と感じる生徒が増加し、「よりよい」関係性の構築とそれによる自己肯定感の高まりに至ったと考えられる。

１．主題設定の理由

（１）新学習指導要領の実施

今の子ども達が大人になる頃には少子高齢化が一層進み、社会構造が変化することで、様々なことが不確定で予測困難な時代を迎えると考えられている。そのような中で今年度から実施の新学習指導要領において、特別活動は「なすことによって学ぶ」ことを方法原理としているが、「なすことで何を学ぶのか」という、係活動や学校行事を通して生徒の伸ばすべき資質・能力を明確にして指導にあたる必要性を示していると認識している。従って、特別活動において「主体的・対話的で深い学び」を目指し、指導方法を工夫することで生徒の伸ばすべき資質・能力を３観点偏りなく身に付けさせたいと考えた。

（２）校務分掌より

本実践を行うにあたり、特に研究内容１で述べる「レーダーチャートを用いた検証改善サイクル」については数年前から改善を繰り返してきた。改善の目的は「先生や生徒の誰もが使える」ようにするためである。これまで、前任校含めて、特別活動部長は５年目となるが、各活動や行事における振り返りを重視してきた。今年度は、汎用性に重きを置き、工夫改善を行った。実践の汎用性を高め、多くの学級で実践してもらうことで学級活動における生徒の主体性を育て、学校経営計画に位置付いている、「学びと育ちの主人公」たる生徒、しいては学校の教育目標である「聡明な人間」（夢や目標をもち、その実現に向け、自ら考え判断して、仲間と共に学び合い行動する生徒）の育成に近づくと考えた。また、今年度から学年学級委員会を指導する機会も得た。これは、指導部長として全校提案する立場と実質的に話合い活動を仕組む立場が一致することとなり、効率的な指導機会を得たことも主題設定の理由の１つである。

（３）学校評価アンケートの結果より

本校では毎年６月と１２月に学校評価アンケートを生徒及び保護者に実施している。昨年６月に実施した結果は、「仲間と何かをやり遂げてうれしい」という質問項目に対して「よく当てはまる」と答えた生徒については次のようになった。

令和２年度中間結果
１年生：４０．０％
２年生：５１．０％（－２７．１）
３年生：６４．９％（－１６．０）
全　体：５２．０％（－２９．５）
※（　）内は令和元年度１２月との比較
※目標指数はどの学年も７６．６％

コロナ禍の影響で昨年度の学校行事は６月のアンケート時点で全て中止や延期となっていた。しかし、活動の有無だけで今後数値が上がってこなければ、特別活動で大切にすべき資質・能力が十分に身に付いていないと考えられる。「な

すことによって学ぶ」ということが方法原理であるが、コロナ禍で活動が制限される中、どうやって自己肯定感を育むのかが昨年来の急務と考えた。今年度の中間アンケートの結果は以下の通りである。

令和３年度中間結果
１年生：３６．３％
２年生：３４．６％（－２１．６）
３年生：５４．１％（－１１．９）
全　体：４１．６％（－２４．５）
※（　）内は令和２年度１２月との比較
※目標指数はどの学年も７０．０％

２．研究仮説

PDCA の役割を明確にして検証改善サイクルを見直し、PDCA サイクルが循環する日常と行事のつながりを意識した上で、生徒が主体的に合意形成を図ることができるような手立てを講じれば、主体的・対話的でより深い学びを具現する生徒の姿を生み出すことができる。

３．研究内容

【研究内容１】生徒自ら学級の実態を捉え、課題を見出し、解決方法までを考え合意形成を図る指導方法の工夫

（１）より深い集団活動にするため、教師の検証改善サイクルの見直し

（２）レーダーチャートを使った生徒自ら学級の実態を捉え話し合う主体性を育てる工夫（生徒の中に PDCA サイクルが生まれる）

【研究内容２】学級の諸課題に多面的・多角的に解決策を見出そうとするリーダー指導

（１）多面的と多角的の違いを明確にする指導

（２）多角的な話題の使いどころの指導

【研究内容３】学級課題の設定から振り返りまでを再構築し続け、日常生活を通してよりよい人間関係を形成し続けようとする生徒の育成

（１）連続し続ける学級課題の設定から日常生活を充実させ続けようとする生徒の育成

（２）よいこと見付けを活用し、相互評価する生徒の育成

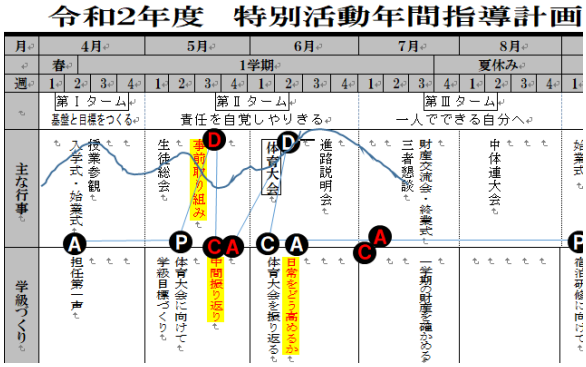
４．研究実践

【研究内容１】生徒自ら学級の実態を捉え、課題を見出し、解決方法までを考え合意形成を図る指導方法の工夫

【実践１：教師の検証改善サイクルの改善】

生徒が検証改善サイクルを意識して主体的に話合い活動を行うためには、指導する教師も同じような意識に変える必要がある。PDCA サイクルの中で最も重要視したのはＣ・Ａ（チェック・アクション）の部分である。生徒同様に教師の意識を変えるために指導部長として真っ先に取り組んだのが、特別活動の年間指導計画にどれ程 C・A が組み込まれているかを調べ、適宜加えることである。(もちろんただ加えるのではなく、実践２のように具体的提案も行った)

図１　昨年見直した年間指導計画



※赤字の部分が主な変更点

生徒も教師も PDCA の役割は次のように考えることが多い。

P→目標をつくる
D→目標を意識して本番やってみる
C→事後に振り返り、評価する
A→評価に応じて次の目標をつくる

しかし、本実践すべてに共通する PDCA は次のようになる。

P→目標をつくる
D→目標を意識して練習など取り組んでみる（本番も含む）
C→中間振り返りなど、事中に現状を振り返る（事後も含む）
A→現況に応じて目標を改善しつつ、次の行動に移る

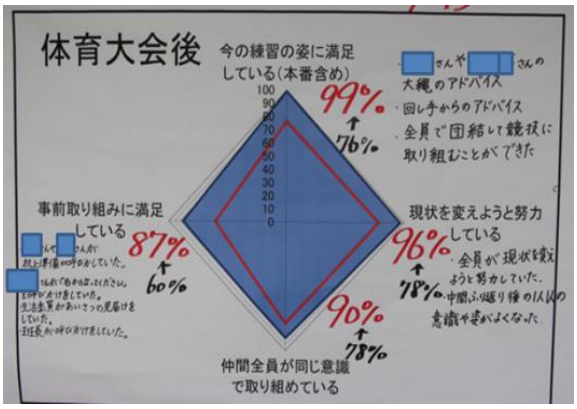
これらを簡単にまとめると、例えば行事において「本番だけで検証改善サイクルを終わらせてしまうのはもったいない」ということである。生徒も教師も中間振り返りのような検証改善を本番までに１回以上はさむことによって、より高次の人間関係を育むことができる。それは図１の生徒の意識予想が事前から中間振り返りを経て本番を迎えるまでにＮ曲線を描いて向上するように実践２のレーダーチャートを見ても明

らかである。

【実践２：レーダーチャートを使った振り返り】

話合い活動の中で最も重視したのは、「生徒の課題意識」とそれが生み出す「主体性」である。なぜなら話合い活動において、議題に対する課題意識が薄い場合、一部の生徒の考えがさも学級全体の考えになったり、同調圧力として他の生徒にのしかかったりする可能性が高まるからである。本実践はどの生徒にも話合い活動をする動機や課題意識を明確にすることをねらいとしている。

図２　作成したレーダーチャート（令和３年度）



※４段階のアンケートの結果、生徒の達成度が%の形で表れる

図２は体育大会前後の子ども達の意識を視覚的に分かりやすくとらえられるよう作成したレーダーチャートである。

・「今の練習の姿に満足している」
　→「目標の達成力：目標を意識している力」
・「現状を変えようと努力している」
　→「創造的対話力：自分で学級のために考えて実行する力」
・「仲間全員が同じ意識で取り組めている」
　→「協調性：学級や仲間のために考えて行動する力」
・事前取り組みに満足している
　→「規律性：ルールを守る力」

このアンケート項目は上記の４つの力がどれくらい身に付いたのかが具体的に聞けるように学級委員会で考えた。（抽象的な項目でもよいが、話合い活動でも学級に内在する問題がはっきりしない場合がある）この結果を受けて話合い活動で考えることは「結果として１００％にならない理由」と「どうしたら１００％に近づくのか」と「生徒による相互評価」の３点である。以下はその話し合いの一部である。

（図２は行事後の振り返り内容だが、以下は行事の中間振り返りのもの）

生徒 A：アンケートの結果からみんな一生懸命練習に取組んでいるはずなのに、「今の練習の姿の満足度」は７６％だった。この結果の原因はよくも悪くも何だろうか。

→誰もが問題を把握するための発問。

生徒 B：大縄は８０回を超えて、リレーも１位なので競技練習には満足している。

生徒 C：でも油断すると本番どうなるかわからない。特に大縄は他の学級と大きい差があるとは思えない。それに、授業準備と忘れ物０があまり達成できていない。

生徒 D：結果的に１位でも練習の合間に好き勝手しゃべって、次の練習のスタートまで時間がかかるのが私は気に入らない。

→競技の結果だけでなく、過程に内在するアンケートに出た２４％の不満足感の一部

（中略）

生徒 A：現状のよさと課題はだいたい出尽くしたところで、既に話題に上がってきている、どうしたら満足度が１００％に近づくのか具体的に考えられませんか？

→把握した問題を解決、合意を促すための発問

生徒 E：練習と練習の合間を短くする必要が私もあると思う。そのために、その日にどんな練習をするのかもっと具体的な学級練習計画が必要だと思う。

→問題に対して具体的な解決策を出し合い、合意に向かう。（これ以後略）

相互評価については研究内容３で触れるとして、これによって生徒たちに内在しているものの、なかなか表に出てこない課題意識が%の形で出てくることになる。数字として表れているため「極端にできている・できていない」と感じている生徒の意識がいい意味で並列化され、価値観をある程度揃えることができる。以下、話し合い後の生活ノートである。

レーダーチャートを見て、改善に向けて努力している項目が高かったけれど、みんなが同じ考えなら１００％になるはずです。違うということはそれぞれの考え方が違うのだと思う。もう一度目標というか、取り組む気持ちを１つにしたらきっと団結力が高まると思う。それによってより競技の質も高まると思いました。

上記の生活記録の他に、「自分はできていると

思っていたのにそうではない考え方の仲間がいることに気付いた」という感想が多く見られた。

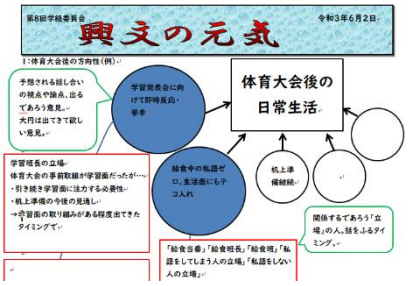
仲間の価値観に触れることで、より高次の人間関係を形成したいと願い、そこから生徒の主体的な話合い活動が生まれたと考えられる。これらは必ずしも行事の話合い活動だけに限らず、通常生活の改善といったもの、つまりはどんな集団生活を考える際にも見られた。また、図２は行事後のレーダーチャートであり、行事の中間振り返りでも同様に作成して振り返っている。（図２内の赤線のチャート部分）行事後については「中間振り返りと比較してアンケート結果が好転した理由」を考えさせた。ここでも「生徒の相互評価」と「行事で培った力をどう日常生活とつなげるか」が重要となる。日常生活と行事のつながりの中で、中間振り返りと本番の振り返りという検証改善サイクルのＣとＡが生徒たちの中で繰り返された。

【研究内容２】学級の諸課題に多面的・多角的に解決策を見出そうとするリーダー指導

【実践３：多面的・多角的に話合い活動を展開するリーダー指導】

学校経営計画にある「学びと育ちの主人公」たる生徒を育成するには話合い活動への動機が不可欠だが、一方で、話し合いを行う視点や違う角度から話題に切り込んで生徒の主体性を引き出すリーダー指導が必要である。そこで取り組んだのが、学級委員たちに「多面的」と「多角的」の違いをはっきりさせ、話合い活動の中でどうやって使い分けていくかである。

図３　くらげチャートを用いたリーダー指導



話合い活動の事前に、図３を活用しつつ、話合い活動の中でどんな話が出てくるのか（図３の円の部分）を予想し、様々な視点で考えさせた。（多面的に考える指導）一方で、多角的に考える指導（図３の赤い四角形の部分）としては視点に沿って考えていく中で、「同じ視点でも立場を変えて話をさせる」ように考えさせた。図３の内容を例にすると、机上の準備ができていないからできるようにしたい。そのために休み時間に呼び掛けよう。という結論ならば、できていない生徒の立場で話をしてもらうのも主体的に呼び掛けを行う動機となったり、気付かなかった手段の欠点について気付くきっかけになったりすることもある。生徒にとって視点を増やすことは難しくなかったが、立場を変えて意見を求めることや、求める瞬間がどこなのか見極めるのかが難しかったようである。以下はそのような話合い活動の様子である。

（体育大会後の日常の充実についての話し合い）
→下線部が多面的な話合い活動
→波線部が多角的な話合い活動

生徒Ａ：今のところ、体育大会の事前に取り組んできた学習面よりも生活面に取り組みたいという意見が大半ですが、具体的に何に取り組むのがいいですか。

生徒Ｂ：朝、教室に入る際や授業前後の挨拶に取り組むべきだと思う。４月はとても元気だったのに、弱くなっていると思う。

生徒Ｃ：挨拶もいいけれど、鞄や下足箱の靴の整理整頓にも取り組んだ方がいいと思う。だんだんできなくなってきている。

生徒Ｄ：整理整頓という考えは悪くはないけれど、一部の生徒であって学級の取り組みというレベルでやるべきことではないと思う。

生徒Ａ：今の生徒Ｄさんの考え方を、生活班としてはどう思いますか。

生徒Ｅ：生活班として、整理整頓はできています。なので学級全体の取り組みとしてではなく、班活動の範囲内で十分です。

生徒Ａ：別の視点でも考えて欲しいのですが、給食中の私語ゼロについて、毎日できていないように感じるのですがどうですか。

生徒Ｆ：給食班としては給食中の私語ゼロについてはコロナ感染防止という視点でもできるように徹底したい内容だと思います。

生徒Ａ：給食中の私語ゼロができない立場で話ができる人はいないですか。

生徒Ｇ：できていないわけではないけれど、そもそも食事中は誰もしゃべっていない。でもいつから話をせず、いつから話をしてもいいのか曖昧な部分もあって困る。

このように様々な視点や立場から話し合いをリーダーが仕組むことによって話合い活動に深

みや幅が出てくる。また、リーダーが対話的なきっかけを生み出すことで他の生徒たちも促さずとも様々な視点や立場から意見を述べるようになってくる。

【研究内容３】学級課題の設定から振り返りまでを再構築し続け、日常生活を通してよりよい人間関係を形成し続けようとする生徒の育成

学校生活の中核として体育大会や合唱祭などの行事があり、日常で高めた力をそういった行事で発揮する。しかし、そのような行事ありきの特別活動がコロナ禍によって根底から覆され、生徒たちの達成感や自己肯定感が下降傾向にあることは本校の昨年と今年の２年間の学校評価アンケート中間結果からも明らかである。しかし、これは学校行事頼みという反省点も含んでいる。本実践は、「行事に向けて日常を高めていく」という従来の学校現場の考え方から「日常生活を年間通して高め続ける」という考え方に生徒も教師もシフトしていくというものである。

【実践４：日常生活を充実させ続けようとする生徒の育成】

すでに実践１～３でも述べたように生徒たちは検証改善サイクルを自分たちのものとしている。何か問題があったから、何か行事があるからその都度何か取り組みを行うというのではなく、再構築（現状と学級の歩みを比較する）し続け、PDCA→CA→CA と繰り返している。今年度具体的には以下のようになった。

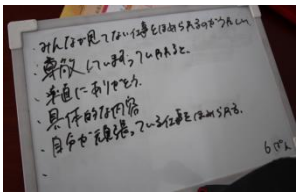
４月 P：学級目標づくり「To aim higher～より高みを目指す～」→４月 D：まずは各班が中心となって動いて日常を高める（生活班なら鞄を丁寧に整頓された状態を目指す）→６月 CA：学校生活の中心は授業。学習班を中心に休み時間中の机上準備と即時挙手（この間行事として体育大会）→７月 CA:「おはよう」の挨拶と給食中の私語ゼロ（１学期終了）→９月 CA：授業で先輩のようにハンドサインを使いこなせるようになりたい→１０月 CA→誰かが話し終わったら１秒で挙手（この間合唱祭中止）→１１月 CA：掃除を「静かに、素早く、隅々まで、最後まで」→１２月 CA→もう一度感染症対策強化、手洗い・黙食

重要なのは、学級委員は話し合いの中心であるが、活動の主体は各班が強力にリーダーシップを発揮させることにある。また、今年度「体育大会」という行事はあったものの、その事前取組は「学習」というおよそ体育大会とは関係のないものを行っているのもこの実践の特徴である。

【実践５：よいこと見付けを活用した相互評価】

実践４のように CA をただ繰り返してもより上位のスパイラルに生徒の資質・能力や自己肯定感は伸びていかない。そこで、CA の話合い活動の中で「誰のおかげで高まったのか」を明確にするよいこと見付けを書いた。この生徒による相互評価こそ、よりよい人間関係を構築したが故にたどり着いた自己肯定感の高まりである。

写真１　書かれてうれしいよいこと見付け



前期の最初に「書かれてうれしいよいこと見付けとは何か」について話し合い、まとめた。年間通じて生活班が中心となって個人の行動のよさとその行動の裏にある気持ちに思いをはせる。学級としての高まりの中で個人に高まりを目指して努力したよさを返す。

写真２　仲間に感謝を伝える会

前期の最後には「前期の仲間に感謝を伝える会」を開く。後期は「１年間ともに学級を高めた仲間に感謝を伝える会」を開く予定だ。

このように活動と話し合い、相互評価をするということを検証改善サイクルとして繰り返していくことで、生徒の次の取り組みへの主体性を生み出し、よりよい人間関係を構築し続ける意識につながった。

５．成果と課題

本研究は検証改善サイクルを１つの手段として教師の行事と日常のつながり意識や、行事ありきの意識を変えつつ、生徒の主体的な合意形成を目指した。主体的・対話的で深い学びを生徒が具現し、結果的に自己肯定感の高まりにつながったと考えられる。成果と課題の詳細については以下のようになった。

○「仲間と何かをやり遂げてうれしい」という意識の変容（学校評価アンケートより）

令和２年度最終結果
１年生：５６．２％（＋１６．２）
２年生：６７．３％（＋１６．３）
３年生：７５．９％（＋１１．０）
全　体：６６．６％（＋１４．６）
令和３年度最終結果
１年生：５２．７％（＋１６．５）
２年生：３８．７％（＋　４．１）
３年生：６７．３％（＋１３．３）
全　体：５２．５％（＋１１．０）
※（　）内は６月の中間評価との比較
※数字は「よく当てはまると答えた生徒の割合」

これにより、本研究実践が生徒のよりよい人間関係を醸成し、達成感や自己肯定感の向上につながったと考えられる。この達成感こそ、今後生徒が直面する予測困難な時代を切り拓く判断力である。

○学校全体として同じ方向性をもつ教職員集団

特別活動指導部長として提案してきた「年間計画の見直し」「レーダーチャートを使った中間振り返り（指導方法の工夫）」「日常生活の充実し続ける」「相互評価の工夫」といったキーワードと検証改善サイクルを機能させるイメージが教職員集団の中に少しずつ浸透しつつある。例えば、伝統を引き継ぐ活動（伝統を引き継ぐ会）について、昨年までは２月の会当日に３年生に受験勉強の方法などを後輩が質問して３年生に答えてもらうという会であった。しかし、担当する２学年の教職員集団が一時的な「行事」としての捉えではなく、１１月から２月にかけて長いスパンの中で今まで培った日常を振り返り、後輩たちが３年生と一緒になって掃除や学習に取り組む、先輩の日常生活の厚みに触れるように仕組みを変えた。これは特活の年間計画や指導部の意向に沿った自主的な取り組みである。また、体育大会の行事を迎えるにあたり、レーダーチャートを使用した学級は３学級にとどまったが、全ての学級で年間計画に則り、「中間振り返り」を行い、検証改善サイクルが機能しつつある。

○多面的・多角的に考え、判断する学年

実践を行った担任の学級のみならず、学年として学級委員会を組織して視点や立場を変えて話合い活動を仕組んだ。その結果、来年以降新しい学級でも話合い活動の方法や検証改善サイクルの考え方は失われない。

○汎用性の高い実践

本実践は特に若い先生向けに指導部で提案してきたものである。特にレーダーチャートを用いた話合い活動は「誰でも使える」ようになっている。また、手段の意図や生徒に身につけさせたい力なども職員会で具体的に提案してきた。

△「自ら課題を見出す」ことに関わる問題

検証改善サイクルの機能やレーダーチャートの使用が目的となってしまうと、ともすると個人攻撃のような話合い活動に陥る可能性が否定できない。レーダーチャートも「１００％にならない理由は」という聞き方が本来問題視する必要のないものまで問題として挙がってしまうこともある。そうなると、はい回り、本来付けるべき資質・能力が薄まる可能性がある。

△「日常生活を高める」ことの限界

コロナ禍で行事が中止・延期する中で、昨年から「評価と合わせて日常生活を充実させ続ける」ことを提案し続けてきた。学校評価アンケートのプラス数値は一定の成果ではあるが、昨年より今年の数字が全体的に下がっており、現２年生は１年生の時の最終が５６．２％であったのに今年は３８．７％となっている。これは不登校等別の問題に影響する可能性がある。来年以降も全校で足並みをそろえる必要性は変わらないが、何をなしてどんな力をつけるのか、工夫改善が必要である。

６．参考文献

・「学級力」を鍛え、授業で発揮させる　新潟大学教育学部附属新潟小学校　平成２４年
・学級・学校文化を創る特別活動【中学校編】文部科学省　平成２７年
・中学校学習指導要領解説　特別活動編　文部科学省　平成２９年